

## 「中国侵略者の末裔」

2016年12月19日

私は、真珠湾攻撃があった1941年に、旧満州の大連市で生まれた。自分のことを「中国侵略者の末裔」だと思っている。父が南満州鉄道勤務で、家族で社宅に住んでいた。3歳を過ぎた頃、裏庭で遊ぼうとして外に出た。その時、社宅の中庭にあったゴミ箱を漁っていた中国人女性が、私に向けて石を投げた。頭のとっぺんに当たり、血が噴き出し、大泣きをした。その傷が、頭に一銭禿を残した。

このことの意味を知ったのは、青年期であった。子どもの頃、「ひめゆりの塔」や「原爆の子」などの映画を観て、日本は米国に痛めつけられたと思っていた。在日の友人が、「これを読み」と言って、2、3冊の本を貸してくれた。それを読み、日本が始めたアジア・太平洋戦争の実態を知った。私に石を投げた女性は、軍隊に守られた日本人が中国で我が物顔に振舞っていることに深い憤りを持っていた。大人には怒りを向けられず、子どもの私をターゲットにしたのである。戦争の実態を知った時、彼女に「中国侵略者の末裔」であることを、実感をもって気づかされた。

『週刊金曜日』の1,116号に、山口大学の瀧瀬厚名誉教授が「今こそ『大日本帝国』総体の侵略の歴史を総括せよ」の論考の中で、「米国には負けたが中国には負けていなかった」「米国に邪魔されなかったら中国には勝っていた」という認識が米国追従を醸成したと述べている。確かに、米軍の日本諸都市への無差別空爆、悲惨な沖縄の地上戦、広島、長崎への原爆投下によって、敗戦を迎えた。これは、米国の言う「太平洋戦争」の敗北であった。この敗北感が米国にいびつに従う路線を醸し出した。

歴史的事実は、西欧列強に伍してアジアの植民地支配を目指した戦争が、米国を中心とした連合軍に阻止されたのである。日本は西欧列強によるアジア植民地からの解放を美名としたが、朝鮮では人、物の収奪だけでなく、文化をも奪い、中国では三光作戦（奪い尽くす、焼き尽くす、殺し尽くす）を展開した。中国帰還者連絡会の人々の証言には胸が痛む。日本軍によるアジア諸国への残虐行為は言語に絶する。明治以降、富国強兵政策を取り、アジア支配を野望とした事実を踏まえなければ、敗戦の意味を捉えることはできない。

戦後、世界の覇者となった米国は軍産共同で、戦争をしなければ、国が立ち行かない経済構造を生み出した。第二次大戦後も、ベトナム戦争から最近の中東戦争まで、世界各地で戦争を起こし続けている。米国に無批判に従うならば、戦火に巻き込まれ、沖縄の実態が示す通り、人権も平和的生存権もなくしてしまう。安倍政権は北朝鮮や中国の軍事的脅威を煽り、戦争のできる国へと「安保関連法案」を強引に作った。更に、憲法も変えようとしている。平和を求める市民の意思に反する。

米国はトランプ氏を次期大統領に選出した。どのような政策を展開するかは未知数であるが、米国経済の浮揚を目指すことは確かであろう。米軍駐留費を出せと言うなら、引き取ってもらえばいい。

アジア・太平洋戦争の実態を見据え、アジア諸国との和解と共生の道を模索することが、求められる戦後責任の取り方である。米国は、日本のアジア寄りの政策を断固許さず、これを求めた政治家たちを強引に切り捨ててきた。トランプ氏の大統領就任は好機である。米国一辺倒から、アジア諸国に謝罪すべきは真摯に謝罪し、宥和を図る時ではないか。

私の一銭禿は年とともに、止まることなく拡大している。頭を撫でる度に、中国人女性の怒りを思い出す。